

南島歌謡における動物の表現

－ジュゴンを中心として－

大竹 有子

Dugongs in Old Ryukyuan Songs: An Analysis of their Roles and Images

Yuko OOTAKE

Whether as an object of hunting or as a mythical creature in folklore, dugongs occupied a unique position in the history and culture of Okinawa. This article analyzes how dugongs are described in old Ryukyuan songs (songs in the Omoro-saushi and old songs from the Ryukyuan archipelago) and attempts to illuminate the old Ryukyuan's worldview communicated through such description. The structure of old Ryukyuan songs and the roles and images attributed to objects appeared in them are fixed. Three roles or images are attributed to dugongs: They are an object of hunting, a messenger of a god, or a female imaginary. Those roles and images are fluid, allowing the dugongs to move across the boundary between the sacred and profane. This fluidity points to the diverse nature of description and conceptualization employed in old Ryukyuan songs and calls for comparative studies on description and conceptualization of dugongs and other animals in old Ryukyuan songs.

はじめに

ジュゴン *Dugong dugon* は、海牛目ジュゴン科に属する海棲哺乳動物である。インド洋・太平洋沿岸の温暖な海域に生息するが、国際自然保護連合・日本の環境省によって絶滅危惧種に指定されている。

沖縄はジュゴンの生息地域の北端にある。ジュゴンは沿岸の浅瀬を餌場とするので人間に目撃・捕獲されることが多く、歌謡や民話などにも登場し、古来

から沖縄文化に深い関わりがあったことは、よく知られている。

本稿の目的は、オモロ・古謡におけるジュゴンの用例を俯瞰し、表現・役割などを検討・分析することである。歌謡を通して、ジュゴンの文化的位置と動物の表現・役割付けについて確認し、ほかの動物の表現と比較して検討したい。

ジュゴンは沖縄文化において特別な位置を占めており、そのことは沖縄学の揺籃期から注視されてきた。ジュゴンについての先行研究は多く、分野もさまざまである⁽¹⁾。南島歌謡の研究においても先行研究はみられるが⁽²⁾、個々の歌謡の解釈における言及が多く、地域・ジャンルを超えて論じられてはいないようである。

民話・伝説（津波の予告、異類婚姻譚など）、考古学・歴史（人头税）、漁労・食文化に関してはいくつかの先行研究があり、近年は自然科学分野と人文科学分野を連動させた報告も、いくつか上梓されている⁽³⁾。紙幅の都合上、こうしたジュゴンについての概説や先行研究については、歌謡研究を中心に民俗・民話などの関連事項は最小限の引用・言及にとどめ、自然科学分野や現在の環境などは省略した。

本稿では、『おもろさうし』と奄美・沖縄・宮古・八重山の各地の古謡におけるジュゴンについての事例を抽出し、検討していく。使用するテキストは『おもろさうし』、『南島歌謡大成』（角川書店刊、以下『大成』）の琉歌篇（登場せず）を除く4巻とする。本来であれば、入手しうる古今すべての歌謡を対象とするのが望ましいが、便宜上サンプルとして『大成』を用いた。これらの用例を一覧表にして俯瞰し、地域や歌謡ジャンルをまたいで検討する。

以下、『おもろさうし』の用例は、表記は原則として岩波文庫本に従う。左側に原文を示し、右側に書き下しを訳として付す。また、引用の後に〔巻番号 - 通し番号〕で示す。『大成』には原則として節番号が付されているのでそれに準ずる。『大成』については〔歌謡ジャンル名 - 歌謡番号 - 節番号〕で示す。引用部分の後に解釈を付した。引用は関連部分のみにとどめた。解釈は基本的にテキストに依るが、翻刻に添うよう筆者が適宜編集した箇所もある。引用部分のうちジュゴンを指す語彙には下線を付した。

1. ジュゴンの表現

オモロ・古謡に登場するジュゴンの用例は延べ51例みられた（本論文の末尾に一覧表を付した）。数としては鳥類や牛馬など他の動物と比べると少ない。『おもろさうし』を例にとると、最多の鷺が34例に対し、ジュゴンは4例である。対句や類歌が含まれるので、表現のバリエーションはさらに少ない。ただし南島歌謡全体においては、奄美から八重山まで各地で用例がみられる。漁労民俗や伝説にあるような印象的なイメージではないが、ある程度の関心がもたれていたことは歌謡にも示されているといえよう。

先に全体の傾向を概観する。歌謡におけるジュゴンの呼称は基本的に「ざん」系であり、宮古に1例のみ「よのたま」[アーク109]がみられる。方言名としては他に「アカンガイユ」があるが、今回のテキストの中にはみられなかった。詳細は文末の表を参照されたい。

対語は基本的に亀である。ほかに魚（スクやイラブチャーなど）の場合や、対語を持たない場合も多い。野生や飼育下のジュゴンは亀と一緒にいることが頻繁に観察されている⁽⁴⁾ので、歌謡の描写は実際の観察や経験によるものであろう。ただし、歌謡の内容が同様であっても、類歌には亀のみ登場して、ジュゴンは欠落する場合もある（例えば宮古篇[クイチャー19]とその類歌）。

以下で具体的に用例を引用しつつ検討するが、1. では原則として個々の用例の例示・解釈程度にとどめ、2. 以下で地域・ジャンルを超えた考察を行う。

1-1. 『おもろさうし』におけるジュゴンの用例

『おもろさうし』には、ジュゴンを歌ったオモロは[巻9-505]、[巻11-650]で、計4の用例がみられる。2首ともジュゴンを捕獲する場面が表現されている。

一 こまかのみおに	こまか島の濤に
おれ みもん	あれ、見物（見事）である
又 くたかのみおに	久高島の濤に
又 <u>さん</u> あみ むすひおろちへ	<u>儒艮</u> 網を結び降ろして
又 かめあみ むすひおろちへ	亀網を結び降ろして
又 <u>さん</u> ひやく こめて	<u>儒艮</u> を百も追い込めて

又 かめ ひやく こめて	亀を百も追い込めて	
又 <u>さん</u> ひやく とりやり	儒艮を百も獲って	
又 かめ ひやく とりやり	亀を百も獲って	
又 おきなます せゝと	沖膾にしよう	
又 へたなます せゝと	辺端膾にしよう	<後略>

[オモロ巻 11-650]

このオモロでは、久高島・コマカ島の濤に網を降ろし、その中にジュゴンを追いつめ込むという漁労の様子が描かれている。もう一首の例である[巻 9-505]でも「亀 捕てる / ざん 捕てる」と、やはり漁労の獲物として登場しているが、[巻 11-650]のほうが詳細な描写である。

ジュゴンを捕獲し、肉を食糧とする習慣は戦後まで続いていた。出土品から、古代から食用とされていたことが報告されている(盛本 [2014] 参照)。オモロではそのための漁労の様子が歌われている。王府時代、八重山の新城島にジュゴン肉(皮)が税として課せられていたことが知られているが、沖縄島近海でもジュゴン漁は行われていた。久高島でも大正の頃までジュゴン漁を行い、村人が共同飲食する習慣があったことが報告されている。波照間氏はこの報告を「豊穡と壮健の象徴・聖餐」とまとめている(波照間 [1999] p1048)。歌謡においては「聖餐」の側面は表現されていないが、祭祀歌謡たるオモロに漁労の様子が詳述されているという事実が、「聖餐」であることを推測させる。

また「百も追い込めて / 獲って」という表現は、豊漁の様子を誇張しているのであろうが、一種の予祝と考えられる。

1-2. 沖縄の古謡における用例

『大成』沖縄篇には、ジュゴンの用例が13例(対句・反復、類歌を含む。以下同)みられる。

役割としては、神の乗り物であるか、オモロの用例と同様に漁獲物であるが、地域をみると前者の用例は沖縄島北部地域、後者はそれ以外(勝連村、久米島)である。神が異界へ帰還するさいにジュゴンに乗るという描写は、今日でも広く知られているが、この用例は沖縄島北部地域に集中し、テキストをみた限りでは他の地域にはみられなかった。その点でも、また1-1の末尾に指摘した

聖餐の素材となる事例からしても、注目すべき用例群である。以下で用例をみたい。

よみのはまによやりいで

なんかはまにしちりいで

あけじけじあけじ ぶんのねのあけじ

あけじけじあけじ たけがねのあけじ

うらめぐりめぐて

じやんのくつつむ

じやんのくつつむ

をしかぜにふかさん

てるてだにてらさん

うさなどいみしょうち

ざりごといみしょうち

とぐちおいさあんどう

みなとおひさあんどう

なまやうしほみつちようみ

なまやうしほみつちようみ

たれちしびぬらさんどう

たればかまぬらさんどう

なつたうみわたりたもれ

ヨミの浜に寄り合い出て

ナンカ浜にしちり出て

アケジケジアケジ 森の根のアケジ

アケジケジアケジ 嶽の根のアケジ

浦廻り廻って

^{ママ}鱈の口ふむ

^{ママ}鱈の口ふむ

押し風に吹かさない

照る太陽に照らさない

見下ろしなさって

鎮座しなさって

渡口がたくさんあるよ

港がたくさんあるよ

今は潮満ちているか

今は潮干っているか

垂れきき帯を濡らさないよ

垂れ袴を濡らさないよ

なつた海を渡って下さい

[ウムイ 178-14 ~ 33]

名護城でのウンジャミの時のウムイである。浜に出て海の彼方に向かおうという神が、ジュゴンに乗る様子が表現されている。「帯や袴を濡らさない」という部分からは、潜水するのではなく神の身体は海上に出た状態で移動することが分かる。ジュゴンは浅い水域に生息し、呼吸のためにしばしば海面に浮上することから連想された役割であろうか。歌謡の表現者たちの目に映っていた風景が垣間見られる。

ねらやじゆやさすい

みなとじゆやみちゆい

いそちはやめり

ネラヤ潮は差すし

港潮は満ちるし

急ぎ早めよ

さんら一さんら一よせてく一
うくらがたや うてだがた
おふいがたや おつきがた
あぶいがたや むかじがた
ていんながたや あけじゆがた
よかてさめ間切のろ
あぐるしち遊ぶ
我身のねらがみや
じやんの口どと取ゆる
いとうはやみり

三郎三郎寄せてこい
御鞍形は御太陽形
鐙形は御月形
鐙形は蜈蚣形
手縄形は蜻蛉形
よかったね間切祝女は
鐙を引いて遊ぶ
我がネラ神は
鱈^{ママ}鯉の口を取る
急ぎ早めよ

[ウムイ 185-1 ~ 13]

引用部分のうち騎乗を描写した部分は、『おもしろさうし』巻 14 - 986 の、知花の眉目秀麗な按司の描写を想起させる。

又 うまひきの
みちやひきのこたら
又 ましらばに
こがねくら かけて
又 まへくらに
てたのかた ゑかちへ
又 しるいくらに
月のかた ゑかちへ

馬の口取りの
御馬の口取りの小太郎が
真白馬に
金鞍を掛けて
前鞍に
太陽の絵を描いて
後鞍に
月の絵を描いて

[『おもしろさうし』巻 14 - 986]

引用部分は按司の乗馬姿（神女説もあり）の描写である。馬の口取り役の登場や馬具の描写が、おおよそ共通している。[ウムイ 185] については、同じく [190]・[369]・[417]・[459] が『大成』で類歌としてあげられているが、[ウムイ 190] 以外はジュゴンとは明言されておらず（[ウムイ 459] は内容がさらに異なる）、鞍などが「馬具」とされている。渡海の表現を伴うので、乗るのはジュゴンであろうが、表現が非常に類似することから、オモロ 986 における馬すなわち神の乗り物と同様の役割といえよう。王府時代の文書ではジュゴンのことを「海馬」と表現していることもあわせて考えたい。

蛇足ながら、生物としてのジュゴンが泳ぐ速度は、最高でも時速 30 キロ程度である(池田 [2012]、市川 [2014])。悠揚迫らぬ様子が神の帰還に相応しいのかもしれない。

次に漁獲物としての例をみる。

んじゆくぶね やじゆくぶね	んじゆく船 やじゆく船
はぎうきて みそれば	接き浮けてお召しになると
<u>ざんのいゆも</u> すーくの魚も	<u>鱺鯉</u> の魚も スークの魚も
ひきよせて 抱きのせて	引き寄せて 抱き載せて
おなり えけりが	姉妹 兄弟が
きもほこり むねほこり みそれば	肝誇り 胸誇りをなさると

[ウムイ 346 - 1 ~ 6]

上のウムイは勝連村比嘉のものである。オモロや他の古謡のように網の描写はないが、船に乗っての漁労の様子がうたわれている。ジュゴンの対語は「すーくの魚」であり、『沖縄古語大辞典』によればすく・しゅこ、すなわちアイゴの稚魚である。スクは保存食の材料であり、寄り物として重んじられていた。これと対語になっていることで、このウムイでは、他界からの寄り物であると同時に貴重な食糧としての側面が注視されているといえよう。

沖縄島北部地域のウムイにも、食糧としての例もある。

あわすすくふ	アワスクフ
あなやまどー	穴回り者だよ
<u>ぢゃんぬいゆや</u>	<u>鱺鯉</u> の魚は
うひさこと	大きいので
ぬすまらんどー	盗めないよ
まくぶいゆーや	マクブ魚は
くちぬいゆーどー	口の魚だよ
ひしぐちに	干瀬口に
やひるさり	八尋叉手を
はいたてて	張り立てて

[ウムイ 384 - 1 ~ 10]

久志村辺野古のウムイである。アワスクフ、マクブといった魚と並んで登

場し、8～10節で漁の様子と分かる。他の地域の類歌ではジュゴンが登場しない。これも前出の用例と同じく、豊漁祈願の意図で漁労の獲物として登場した例である。

以上でみたように、沖縄篇の用例にみられる役割は漁獲物と神の乗り物に大別されるが、これらの用例の大半がウムイであることも考慮するべきであろう（一例のみミセセル）。ウムイやオモロはミセセルやオタカベなどと比べれば、内容には生産活動などの叙事的要素があるが、祭祀や儀礼に源をもっている。このような歌謡に登場するのであれば、漁労の描写であっても、大漁を祝う以上の意味があると考えられるべきであろう。オモロの用例と同じく捕獲後の用途は描写されないが、久高島の村人による共食のような場で消費されたことを想定することができよう。

1-3. 宮古における用例

『大成』宮古篇においては14例の用例がみられる。ただし歌謡の数としては4首で、つまり対語や反復が多いということである。

宮古でジュゴンといえば、『宮古島旧記』（1748年）収録の、津波を予告したヨナタマの故事が想起されよう。ヨナタマはジュゴンであるとは明記されていないが、人面魚体で能くものを言ったという点、燻製にしようとして火にかけたという点からジュゴンと考えてよかろう。先行研究でもジュゴンに関する伝承として扱われている。

歌謡においては、津波の予告のモチーフはみられない。歌謡ジャンルとしては、沖縄篇がウムイばかりであったのに対し、宮古篇ではアークとクイチャーという生活の場に近しいジャンルである。

宮古篇において目を引くのは、人名としての用例である。

うやんまう	親阿母〈奥さん〉の
あびいなーや	呼び名は
たるーていがよー	何といていたのかね
うやんまう	親阿母〈奥さん〉の
あびいなーや	呼び名は
<u>じゃんみがよー</u>	<u>儒良メガよ</u>

うやんま	親阿母〈奥さん〉
ちやうとういどう	としていて
<u>じゃんぬな一ゆ</u>	<u>儒良</u> の名を
いじゅんむよ	もらうか
あんさり	阿母さり
ちやうていどう	として
いずぬな一ゆ	魚の名を
いずんがよー	もらうのか

[アーク 26 - 46 ~ 49、『宮古島の歌』 10 も類歌で同様の表現あり]

ここでは女性の名としてジュゴンが登場している。引用のアークにみられる「じゃんみが（ざんめが）」が一般的な女性名であるかは断じ難いが、引用部分の前の文脈では共寝の描写があることから、ジュゴン=女性（肉体的側面）のイメージが、民話のみならず歌謡にも投影していると推測することができる。これについては八重山の用例でも再考したい。

上のアーク以外は、すべて漁獲物としての用例である。

あさりそで 下りおいばよ	潮干狩りしようとして下りていたら
佐和田やの 親たがよ	佐和田家の親たちがよ
いらぶちゃ 取いうみゃいよ	イラブ〔チャー〕〈魚の名〉を 獲って参られて
つものかぎ 親たよ	肝の美しい親たちよ
<u>よのたまど</u> うさまいばよ	<u>儒良</u> を納められたので
あてぼからすかいばよ	とても歓らしいので

[アーク 109 - 3 ~ 8]

上の「長びだあーご」は短い1篇であるが、漁獲物としてのジュゴンを表す明快な用例である。ジュゴンの対語は魚のイラブチャーで、ジュゴンに比べ、ごく普通の漁獲物である。この用例で特に目を引くのは「よのたま」という呼称で、『大成』収載のジュゴンの用例の中で「ざん」系以外の唯一の用例である。「よのたま」という呼称は、ジュゴンをヨナタマと称したことや、ヨナタマと呼ばれるものという魚の民話を想起させる。「よのたま」と「ヨナタマ」が同一かどうかは議論の必要があるが、ここでは指摘にとどめる。ただしヨナタマと

いう呼称は「海の魂」の意とされ、民話にみられる津波の予告のように神聖さを帯びているはずであるが、このアークでは、表現されている限りではよい漁獲物という性格にとどまっている。

一方で、漁獲物ではあるが、ただの獲物とは異なる用例が「古見の主」[クイチャー 19] である。内容は、漁で網にかかった亀 / 儒艮の夫婦を、喜んで調理しようとする、亀 / 儒艮が口をきいた、というものである。

うぬかみぬ あいソや	この亀が言うには
うぬ <u>ざん</u> ぬ ヨんソや	この <u>儒艮</u> が言うには
ばぬゆ ふぁーでいやちが一よ	わたしを食べようとしているのかね
<u>ざん</u> ぬ ふぁーでいやちが一よ	<u>儒艮</u> を食べようとしているのかね
コンノしゅーや いらまん	古見の主は 本当に
うきなぬら やらむぬ	沖繩上りなされるとのこと
いしどうぬや どうキまん	磯殿は 本当に
ソイぬりや やらむぬ	首里上りをなされるとのこと
ばぬゆ ゆるさちがらよ	わたしを許したならば
<u>ざん</u> ぬ ゆるさちがらよ	<u>儒艮</u> を許したならば
まばいにゆ うささい	真南風根を吹かせましょう
やらぎにゆ うささい	和風根を吹かせましょう

[クイチャー 19-29 ~ 34]

このほかに [アーク 63]、[クイチャー 39]、[「宮古島の歌」 6] は宮古篇における類歌である。ただし 3 首はいずれも内容は同様ながら、登場するのは亀のみで、ジュゴンは見られない。これらの歌謡の主役は亀であるのかもしれないが、前述のように亀とジュゴンは対語であることが多いので、引用の部分はジュゴンが単なる漁獲物・食糧ではないことを示している。

この用例は民話と歌謡の内容が関連している。獲物の魚類がなんらかの予告や警告をする話は、民話研究でいう「ものいう魚」のモチーフで、ジュゴンが津波を予告したという民話も類似の筋立てである。ジュゴンや亀は単なる獲物や食糧ではなく（あるいは獲物や食糧であると同時に）、人語を操るような神通力を持つと考えられていたということである。実際のジュゴンと一般の魚群を比べると、ジュゴンや亀は大きさがずばぬけており、独特の容姿である。哺

乳類や魚類といった自然科学の分類概念とは異なるが、これらの歌謡の表現者たちも魚類とは異なる外見に、自ずと特異なイメージを持ったのであろう。

また、引用箇所以外では漁の様子がみられる。浜に小舟を引き下ろし、風いだ海に網を降ろして囲み、その部分を締める、と描写されている〔クイチャー 19-13～22〕。また、持ち帰って中庭に横たえ、包丁や俎板を鳴らす、という調理（の前段階）も描写されている〔クイチャー 19-24～25〕。歌謡の時代に限らず、ジュゴンを食用としていた戦後すぐの風景も同様であったであろう。ジュゴンの捕獲が「あていぬ ぷからしゃんよー（とてもの嬉しさに）／どうきぬ いさオさんよー（あまりの喜ばしさに）」〔クイチャー 19-23〕とあるのは、ジュゴンの肉は美味であるといわれることや、貴重で多量のたんぱく源であることからであろう。

1-4. 八重山における用例

八重山篇では、通算 18 の用例がみられる。

まず、宮古の「ものいう魚」の事例と関連する用例をあげる。類似する歌謡は八重山篇には 2 例みられるが、宮古の用例とは異なり、ジュゴンの哀願を無視して捕獲したところ飢饉になったという内容である。

ざんぬ夫婦ぬ うぶぶら	儒艮の夫婦の大馬鹿者
亀ぬ夫婦ぬ なまぶら	亀の夫婦の愚か者
浜や崎 ぱりうれ	浜の崎に走り下り
ゆにや崎 飛びやうれ	砂州の崎に飛び下り
(略)	
鳩間主ぬ 言葉ぬ	鳩間の主の言葉が
目差主ぬ はなしぬ	目差主の話が
ざんぬ夫婦や ゆらしいな	儒艮の夫婦は許さない
亀ぬ夫婦や 許しょうり	亀の夫婦はお許しなさい
ざんぬ夫婦ん ゆらさぬ	儒艮の夫婦も許さない
亀ぬ夫婦ん ゆらさぬ	亀の夫婦も許さない
ざんぬ夫婦ん とうりわり	儒艮の夫婦も捕りなさり
亀ぬ夫婦ん とうりわり	亀の夫婦も捕りなさり

亀ぬ夫婦ぬ ちいみばうけ
鳩間村 がしいばいきだで

亀の夫婦の罪を受け
鳩間村に飢饉がやってきたと

[ユンタ 153-10 ~ 11、15 ~ 19]

ことば通りに読めば、ジュゴンと亀を捕殺したら亀の祟りがあったということになるが、先述のようにジュゴンと亀は対語であり、同一視されている節もあるので、ジュゴンが関わって飢饉をもたらした用例としてよかろう。このユンタではジュゴンがしゃべったことにはなっていないが、捕殺の罰に飢饉がきたという点から「ものいう魚」の類型であるといえよう。

同様の内容の竹富島の用例も収載されており、こちらはジュゴンが捕まったところまでで中断しているが、引用の歌謡は「鳩間ぶなびとうゆんた」、竹富島の用例は「はとうままり〈ゆんた〉」（鳩間生まれゆんた）と類似のタイトルであるので、類歌としてよかろう。

八重山でジュゴンといえば、新城島に貢納物としてジュゴンが課されたことはよく知られている（大浜 [1971]、盛本 [2014] p 76 ~ 81）。島の男性たちはジュゴン漁をして納税を遂行したわけであるが、その漁の様子を表現したユンタが「ざんとうりいゆんた」である。

内容は、ジュゴン漁のための網を作るため、山からアダンの気根やオオハマボウの表皮を採集するところから始まり、「大目網 / 八爪網」を作って船で海に出る、と描写される。歌謡の主眼であるモチーフの前に、その前段階、前々段階を順序だてて描写することは、南島歌謡とくに祭祀歌謡の特徴のひとつであり、小野重朗のいう「生産叙事」である。例えば池間のマジナイゴトは、下痢の治癒を祈願する内容であるが、腹痛の原因となった過食を起こした魚を捕る場面、さらにその漁で用いた船を造る場面まで描写している。また奄美の「芭蕉ナガレ」は、神衣装のための芭蕉布を織る工程が、芭蕉の木が生えている場面から順序立てて描写されている。「ざんとうりいゆんた」も同様の構造をもつことは、ジュゴン漁は「生産叙事」の形式でうたわれる必要のある特別な作業であることを示唆している。

以下はジュゴンを捕獲する場面である。

ざんぬ夫婦ゆ 見るんでゆ
亀ぬ夫婦ゆ 見るんでゆ

儒艮の夫婦を見ようと
亀の夫婦を見ようと

立ちいなたちい 見りばどう
潮ゆ干し 見りばどう
ざんぬ夫婦ぬ くまりゃんてい
亀ぬ夫婦ぬ くまりゃんてい
いしょ舟に 載しょうり
なら舟に 載しょ(う)り

立ちに立って見ると
潮を引かせてみたら
儒良の夫婦が隠れていて
亀の夫婦が隠れていて
漁船に乗せなさり
自分の船に乗せなさり

[ユンタ 220-11 ~ 14]

捕り物の場面は描写されていないが、体格が大きなジュゴンの漁は決死の作業であったという⁽⁵⁾。

引用部分の後に、ジュゴンに乗せた船で島の港に戻ると、それを見ようと慌てて走ってきた村人の下着が外れてしまったという描写が続く。ジュゴンは新城島に特に課せられた上納品であるから、ジュゴン漁の成果は村全体の勘案である。にもかかわらず、「ざんとうりゆんた」は卑近な笑いで締めくくられている。この笑いは、宮古篇の女性名の箇所でもたようなジュゴンと女性性の関係にも近いように感じられる。

八重山のユングトウは様々な生業を予祝する呪言であるが(『大成』八重山篇解説)、「ざんがみや誦言」はジュゴンに関するユングトウである。八重山篇には類歌が4首収載されている。

崎枝ぬ東ぬ 名蔵ぬ西たんが
ざんかみやまぬ ゆうりんどう
聴だる耳や ばらな一 足ぬ走り
走ったる足や取らな一 手ぬ取り
取ったる手や 食はな一 口ぬ食い
食ふだる口や すんぐらるな一
な一にぬすんぐられ一
すんぐらりだな一ね一 泣な
口ぬ泣き
目とう鼻とう すぶつとうなつたゆ一
しいさり

崎枝村の東方の 名蔵村の西方に
儒良〔亀〕が漂着しているよ
聴いた耳は走らず 足が走り
走った足は取らず 手が取り
捕らえた手は食わず 口が食べ
食べた口は殴られず
背中が殴られ
殴られた背中では泣かず
口が泣き
目と鼻とがびっしょりとなりましたよ
と申し上げます

[ユングドゥウ 1]

引用したのは石垣島川平村のものであるが、同様のユングドゥは石垣島大川村・竹富島のものも収載されている。このユングドゥは、言葉遊びまたは笑い（哄笑：池宮 [1987] p. 52）の要素を含み、先に挙げた「ざんとうりいゆんた」の末尾を想起させる。

石垣島大浜村の「鳩間じらば」は、宮古の用例でみたクイチャー「古見の主」と同様の内容である。

主ぬ前ぬ、言葉ぬ	主の前の言葉が
目差主ぬ、言葉ぬ	目差主の言葉が
うるじいんや、 <u>ざん</u> 食ぬ	初夏には <u>儒良</u> は食べない
ばがなちいや、 <u>ざん</u> 食ぬ	若夏には <u>儒良</u> は食べない
主ぬ前ぬ、うかぎんどう	主の前のお蔭で
目差主ぬ、みぶぎんどう	目差主のご恩義で
まにちゃあ上ん、あこーら一な	まな板の上に登らずに
かたな刃ん、かきらるな	刀の刃にかけられずに
主ぬ前ぬ、旅しょうらば	主の前が旅をなさるなら
沖縄までいん、うとうむす	沖縄（本島）までもお供する

[ジラバ 25 - 20 ~ 29]

クイチャーの用例と同じく、このジュゴンは役人の言葉で俎板と包丁から辛くも逃れた。ジュゴンを捕獲する歌がある一方で、ジュゴンの視点での歌が同時に存在することは、歌謡の表現者たちの自然観の一端をうかがわせる。

次の用例は、宮古篇でも指摘したジュゴンの女性性を示すものである。

古見ぬ主ぬ	古見村の主の
まかないゆ	賄い女に
なれらば	なってあれば
はらぬ主ぬ	村の主の
ゆばい妻に	夜這い妻（妾）に
なれらば	なってあれば
（略）	
いりぬび一ぬ	西の干瀬の
<u>ぬりざん</u> とうん	<u>乗り儒良</u> とも

たといられ
東ぬびーぬ
ぬりがみとうん
なみられ
たといられ
なみられぬ
しんさー

たとえられ
東の干瀬の
乗り亀とも
比べられ
たとえられ
並く比べられの
辛いことよ

[ジラバ 81 - 4 ~ 5、10 ~ 12]

このジラバでは、役人の賄い女に所望された美女が、周囲の人々から山の木の枝やジュゴン / 亀に例えられて辛いと独白している。「乗りザン / 乗り亀」に用いられている「乗り」は、例えば宮古のマッサビ系の「いきぬぶしじらば」に「船なりてん、ゆぬ乗らり（船になっても同じ乗られだ） / 命ぬあるけん、乗られーりや（命のある間に乗られていたなら）」[ジラバ 44 - 24・25] といった用例を想起させる。このジラバの主人公は賄い女になることを拒否して死に、その遺体から生えた木で造られた船に、賄い女になることを求めた役人が乗ったことを嘆く内容である。

賄い女についての文脈でジュゴンが登場することは、ジュゴンを女性の代わりとする世界各地の風習や、民話「エイ女房」を想起させる。後述するが、ジュゴンにはイメージとして、女性性が投影されていたといえよう。

1 - 5. 奄美における用例

奄美篇では 2 首に各 1 例がみえる。

みぶね のりこのて
いじきぶね のりこのて
だんぬいゆや すくまわり
かめぬいゆや うわまわり
あおすび どこ ゆるしゅり
まおすび どこ ゆるしゅり
(略)

御船に乗ろうと企んで
良い船に乗ろうと企んで
ザンの魚は (海の) 底回り
亀 (の魚) は (海の) 上回り
青魚多く許し
真青魚多く許す

すくばらに つみこて

底腹 (船底) に積み込んで

[奄美：オモロ・クチ・タハブエ 232-10～20]

他地域の用例でもみた、漁獲物としての用例である。この用例は「二月コエモン祭のオモロ」の一部であり、「あけもの どこ ゆるしゆり（揚げ物多く許し）/ゆりもの どこ ゆるしゆる（寄り物多く許す）」（232-3・4）とあるように、豊漁を祈願する内容である。ジュゴンは豊かな漁獲物の一部として登場している。

もう1首はあしび歌の「こき節」の一節である。

すいたるぬうちうみなんじ	澄み切った内海〈住用村見里の内海〉に
<u>ざんぬいゆぬこまていこまてい</u>	<u>ざん</u> の魚が入って入って
うれいとうていかみゆんちゅや	それを捕って食べる人は
やまとかちぐゆうぐゆう	大和へ御用だ御用だ
	〈罪人として召しとられてしまう〉

[あしび歌 30 - 285]

これも漁獲物、食糧としての用例である。食べると処罰されると言及されている点は他の用例にはない。冒頭で述べたようにジュゴンは環境省が絶滅危惧動物 IA ランク（ごく近い将来、野生での絶滅の危険性がとても高い種）に指定しており、いま実際に捕獲して食べると処罰の対象となる。この用例については、近世に上納物とされたジュゴンを庶民が自由に食糧とすることを禁じられていたことを示すものであろう。

推測の域を出ないが、禁止への言及の背後には、美味といわれるジュゴンの肉への憧憬が揺曳しているように感じられる。ここでのジュゴン肉は、儀礼の場での共食のためというよりは美味しい食糧として登場しているのではないだろうか。

2. オモロ・古謡におけるジュゴンの性格づけ

1. では地域別に個々の用例をみたが、反復や類歌の割合が多く、実際の用例は通算よりも少ないと感じられる。一方で、考古学や民俗の報告からは、ジュゴンと沖縄の人々の多様な関わりがみられるが、歌謡においてはそれらは背景であって、詳細に表現されるとは限らない。それを踏まえた上で、オモロと『大成』収載歌謡におけるジュゴンの役割をまとめてみよう。

南島歌謡においては、生命を持つ動植物か、有機物である道具類であるかに関わらず、一定の役割（イメージ）が与えられている場合が多い。例えば、蝶は魂の象徴、馬は神や貴人の乗り物、牛は農耕獣、といったようにである。

ジュゴンに付与された役割は、次の3つに大別することができる。

①漁獲物、食肉用（最多）

②神の使い

③女性性の投影

以下で、役割ごとの用例と表現を整理してみる。

2-1. 漁獲物としての用例と表現

『おもろさうし』の他、南島全域でみられる。漁法や調理の描写もみられる。特に網を用いる漁法は、[オモロ 650]のほか、ジュゴン漁に関わる各地の歌謡にもみられる。漁法に限らず、「ざん捕りユンタ」[ユンタ 220]は漁に用いる船を制作する段階から詳細に述べる、生産叙事的な描写をしている。ジュゴン漁が重要な作業であったことが分かる。

新城島においては人頭税の上納品であり、王府で食材とされたことは知られているが、戦後まで一般でも肉を食べていたという聞き書きは多い。歌謡においても、漁獲物がそのまま食物になる用例が散見する。歌謡の内容によって、単に美味な漁獲物である場合もあるし、村落の共食儀礼に登場したと推測されるものもある。また「ものいう魚」タイプの事例は、獲物・食糧でもあり神通力を持つという多面性をみせている。

ジュゴン以外の漁獲物としては、マクブ魚・タマミ魚、スクの魚などの魚類がみられる。これらは豊漁を祈願する文脈で、漁獲物としてジュゴンとともに羅列されることが多い(例[ウムイ 271, 244, 343]など)。この中にはヒートゥ(海豚)[ウムイ 291 - 14・496 - 14]、ヒートゥ/クジラ[沖縄篇補遺 189 - 15・16]、亀などもみられる。亀は前述のようにジュゴンと対語になることが多い動物であり、2-2の論点でも関連する動物である。なお、ジュゴンの肉は非常に美味であるという記録や聞き書きは沖縄に限らず多い⁽⁶⁾。

2-2. 神の使い

神がジュゴンに乗り、神の国に帰るという有名な描写は、沖縄島北部のウムイの用例のみにみられる。類歌によっては馬の場合もある〔ウムイ 369〕。ジュゴンと表現されていても、馬具の詳細な描写から馬に準じた表現といえよう。

沖縄篇の箇所では知花の按司のおもろについて触れたように、南島歌謡には「神の騎行」というべきモチーフがみられる。奄美の「のりがみのおもろ」〔おもろ 1〕、八重山の「びやんな島ゆんた」〔ユンタ 224〕など各地にみられ⁽⁷⁾、いずれも神や貴人の騎乗姿を描写したもので、鞍などの馬具の模様、馬を曳く下人の登場がみられる点が共通する。

また、民俗においても神が馬に乗って常世から来訪するという報告がある。久高島や粟国島では、神は白い馬に乗って御嶽に来臨するという。久高島では、白馬の姿で島を巡行する⁽⁸⁾ともいう。

沖縄島北部地方の歌謡にみられる神の乗り物としてのジュゴンの表現は、これら馬に乗る場合の表現よりは描写が簡潔であるが、馬具に言及する点、神が乗ることについては共通する。よって、海中における馬の役割を担っているといえよう。

亀はジュゴンの対語であり、類歌によっては亀のみの登場である場合もあることは指摘したが、この神の乗り物という役割については、亀が担っている用例は、『大成』においては見られない。ただし『遺老説伝』に収載されている善綱大屋子の話には、亀とニライカナイの関連がみられる。「浦島太郎」にもみられるように、亀が異界との行き来を助ける民話も報告されているので、こうした事例からジュゴンと亀が交代することも可能であることは推測される。

宮古・八重山の事例〔クイチャー 19〕・〔ジラバ 25〕・〔ユンタ 153・203〕では、獲物であるジュゴンが命乞いをする描写がある。津波を予告したという民話と類似した内容であるので、これも神や霊異と関わる事例に含めることができよう。とくに、助命と引き換えに沖縄までの航海を守護しようと言っている点は注目される。航海を守護するといえば、をなり神のおもろや伝承に登場する鳥が想起されようが、その役を果たそうということは、単なる動物以上のある程度の霊力をみとめていたといえよう。

波照間島では、ジュゴンを獲ろうとした男が海に引き込まれ、別人のようになって帰宅したという伝承がある。以来その男の家は裕福になり、長男は特別な力があるとされ、代々「ザンガラ」とあだ名されているという⁽⁹⁾。C.アウエハントはこの話に海中他界の往還モチーフをみているが、神の乗り物としての役割と通じる部分がある。また特別な力を授かったという点は、他界を源泉とするのかもしれないが、ジュゴンに神通力をみていたことを感じさせる。

ただし用例の全体をみると、ジュゴンは鳥や蝶と異なり神の化身ではなく、あくまでも使わしめにとどまると考えられる。その神との距離が、以下でみるような俗なイメージも併せ持つ余裕となっているのであろうか。

2-3. 女性性の投影

宮古にのみではあるが、「ざんメガ」という女性の名がみられる〔アーク26、『宮古島の歌』10〕。名前の場合には肯定的に用いられているが、八重山の事例では、役人の賄い女に所望された女性が「乗りザン／乗り亀」と表現されている〔ジラバ81〕。この場合は、文脈から性的な意味をみるべきであろう。

民話においてはジュゴンが人間の男性の妻になる、いわばジュゴン女房が採話されている⁽¹⁰⁾。同じく民話のエイ女房は、漁夫が雌のエイと結ばれる話であるが、これは実際の風習を背景にしていると言われる。市川・縄田両氏が指摘しているが、ジュゴンに女性をみる意識は、沖縄だけでなくアラブにもみられ、また東アフリカ沿岸域では、漁師が雌ジュゴンを女性の代わりとする可能性があったという⁽¹¹⁾。沖縄においても同様の見方があるといえるかもしれない。

また、古宇利島の創世神話では、人類最初の男女はジュゴンの交尾をみて男女の道を知ったとされる。ここではジュゴン同士であるが、ジュゴンに女性の、とくに肉体のイメージがあり、それは歌謡にも反映している。

3. 動物の表現全体からみたジュゴンの用例

ここでは前節でみたジュゴンの役割を踏まえ、動物の表現全体からジュゴンの用例を俯瞰したい。まず南島歌謡における表現の特徴としては、ジュゴンの言い換え表現や美称がないことである。一般に、南島歌謡とくに祭祀歌謡は、

ひとつの事象を異なる視点から対語・対句で表現し、それを繰り返しながら展開することが多い。言い換えは美称を兼ねることも多い。ジュゴンの場合には生息域を同じくする海の生物が対語とされているわけだが、南島歌謡の表現の中では希有とまではいかずとも目を引く点である。

他の動物、さらには歌謡に登場するモノ全体についての表現でみたとき、ジュゴンの表現には以下で述べる2つの問題点があげられる。

3-1. イメージの振幅

『おもろさうし』の用例に限ってみると、馬は神や貴人の乗り物、鳥は船か霊力に関わる、といったように役割がある程度固定している。『おもろさうし』における玉と水が担うイメージについては筆者が以前まとめたが⁽¹²⁾、どちらも用例を明快に整理・分類することができる。蝶も神・霊の化身や他界との往還に関わって登場する。祭祀歌謡以外のジャンルや異なる地域の用例を比べると、これらの霊力が薄れて身近な動物のように描写されるような場合もある。

動物に限らず、例えば石や金なら「いしらご / ましらご」[オタカベ1]、「いしきよら (稲)」[オタカベ3-128]、「石くじま / 金くじま」のように堅固な様子を表す美称辞である。『おもろさうし』の「石は割れる物 / 金は僻む物」[巻8 - 466]のような例はありうるが、際立った例外である。

しかし、ジュゴンは用例を一覧すると、漁労と密接につながりながら、神の使いとしての性格も確かに持っている。また、漁獲物か聖餐の対象かということについては、食材という用途が共通するため歌謡の表現からは境界を明確にしにくい。一方で女性性を投影する用例は、肉感的で良いイメージではなく、卑しめているようなニュアンスも感じられる。

馬・鳥・蝶などと異なる点は、漁獲物・食物であった事実によるものかと考えられる。前述の言い換え表現がみられないことも、理由を同じくするのもかもしれない。ジュゴンは他の動物と比して、与えられるイメージの振幅がいささか大きいように感じられる。これはジュゴンだけの傾向であるのか、他の動物などにもこうした傾向はみられるのかといった検討や詳細な説明は、今後の課題である。

3-2. 歌謡の表現者たちの分類概念と自然観

歌謡の表現者たちの生物分類は、当然ながら現在の自然科学や分類学とは異なる。ジュゴンは魚類ではないが、「ざんのいを」という呼称から魚の一種とみられていたといえる。これは対語である亀についても同様である。海の生物であり、船を出して網で捕獲するという点が魚類と共通するせいであろう。『沖縄古語大辞典』では「いを(魚)」を「さかな。魚類の総称」と定義しているが、「ざんのいを / かめのいを」のような場合は、「いを(魚)」という語を海棲生物というほどの意味で用いていると考えるべきであろう。「くじら」「わにさば」も魚類と並んで歌謡に登場することから、大きさは別として、生息地や形態の類似によって把握されていたといえよう。

一方で、亀と対語になっている点は、漁獲物として注視していたゆえの経験知、民俗的な知識がみられ、生態学的にも正しいといえる。ジュゴンと亀は分類学上は同種ではないが、相性がよいというべきか、自然でも飼育下でも一緒に泳いだりして過ごすことがよく報告されている。

亀とジュゴンの用例を検討すると、両者は混同されているというか、役割上の行き来がみられる。例えば宮古・八重山で挙げた「ものいう魚」の例では、類歌によってジュゴンだけの事例も亀だけの事例もある。見間違えるのではなく、区別はあまり重要ではないと思われていたのではないだろうか。

八重山の新城島の七門御嶽の調査では、神域に安置されていたジュゴン骨に交じってウミガメ類の顎骨が1点出土している(盛本 [2014] p87)。奉納時に混入したとか、一緒に捕獲したから奉納したということも考えられるが、この事例からもジュゴンと亀の関わりの密接さが示される。

古謡の表現者たちが、この世のあらゆる現象について、分類する基準はどこにあったのか、どのような点に着目したかは、現代人のセンスからは思ってもみないものであろう。他のテーマや用例を洗い出すことで全体をみることができようが、ジュゴンというテーマからも垣間見ることができる。

おわりに

沖縄文化におけるジュゴンというテーマにはいくつかの切り口がある。南島

歌謡の表現という視点は、その小さな一部にすぎない。したがって、本稿はジュゴンをめぐる文化現象の重箱の片隅の隅とでもいえる規模である。しかしながら、古謡の表現は歌謡を表現した人々の世界観の現れと考え、ミクロの視点から全体の特徴を指摘することを旨とした。

この目的により近づくには、今後の課題が残る。まずは市町村史などから歴史・民俗の研究成果を詳細に取り入れることである。例えば宮古・八重山の「もの言う魚」型の歌謡と、津波を予言したという内容の民話のような用例を通して、歌謡と口承文芸の相互の表現を検討して再考したい。

また、他の動物の表現を個々に詳細に分析し、動物の表現という視点から俯瞰することも必要である。ジュゴンの用例を検討する過程で、対語である亀や、神の乗り物という関係で共通する馬についての用例も、否応なく目に入るようになる。個々の動物に限定せず全体を眺望することから、歌謡の表現者たちの世界観の一端をみることができるだろう。

ジュゴンは、沖縄の自然・民俗文化の両面で、特別の印象をもって語られる。文化においては人魚伝説や神の使いとして、自然分野では絶滅危惧種として環境保全、基地反対運動のアイコンとして、野生生物としては一般にもよく知られている。沖縄の繁華街を歩けば、Tシャツなどのグッズも多くみられる。時代にとまなう変化により、オモロや古謡とは異なる関わり方ではあるが、これらは現在でもジュゴンが沖縄の人々にとって近い動物であることを示すのではないだろうか。歌謡という視点でいえば、海勢頭豊「ザンの海」、Cocco「ジュゴンの見える丘」など、ジュゴンの歌は現在でも生まれている。

ジュゴンが現在知られているのは、辺野古沖の米軍基地建設予定との関わりが大きいだろう。姿や生態を見ると平和・安穩そのもののようなジュゴンが、政治的できな臭い話題をもって知られていることは、まことに皮肉といわざるをえない。個人的になるが、沖縄文化とジュゴン、さらには自然との関わりを古謡の表現から検討することで、現状を再考する蟻螂の斧として、この小論を提示したい。

註

- (1) 例えば歴史学では高良[1990[1984]]、民俗学では谷川1986[1996]、考古学では盛本[2014]
- (2) 例えば喜舎場永珣『八重山民謡誌』沖縄タイムス1967年、池宮[1987]、波照間[1999]
- (3) 例えば池田[2012]、市川・縄田[2014]
- (4) 実際の観察については以下を参照のこと。生村元『人魚の微熱—ジュゴンをめぐる愛とロマン』パロル舎、1998年および、もいちくみこ作、つちだよしはる絵『ふたりはいつもともだち』金の星社、1999年 参考文献の多くにも同様の記述あり。
- (5) 池田[2012] p 154～155、盛本[2014] p 78～81。現在の生態調査も似たような場面があるようだ(市川[2014] p 58～64)。
- (6) 直接の感想としては片岡 [1997] p130。辺見庸もフィリピンで好まれている様子を記録している(「人魚を食う」『もの食う人々』角川文庫、平成22[平成9]年に収載)。ただし市川光太郎は「硬い。そして少し獣臭い(略)噂で聞いていたほどおいしいものではなかった」という(市川 [2014] p 96)。スーダンでの体験なので、調理法が問題かもしれない。
- (7) 類似の表現は、例えば[クエーナ49-15～26]、[ウムイ216・303・326・410]、[ウムイ310・504、ウムイ369(類歌あり)]、[ウムイ400]、[ウムイ417(類歌あり)]など、宮古でも[アグ38-8～14]、[アグ49]、[クイチャー40]、[『宮古島の歌』39]など多くみられる。
なお「のりがみのオモリ」は祭祀歌謡であるが、「びやんな島ゆんた」は男女の間を描写しているので、ジャンルや状況は異なる。また描写の詳細や用例数も地域によって差があるので、「神の騎行」に着目して用例を分析することは今後の課題である。
- (8) 比嘉康雄『日本人の魂の故郷 沖縄久高島』集英社新書、2000年 p 91。
- (9) C. アウエハント著、静子・アウエハント監修「HATERUMA——波照間・南琉球の島嶼文化における社会=宗教的諸相」榕樹書林、2004年、p 119～120、150
- (10) 倉沢 [2002] p 58、池田 [2012] p 146。
- (11) 市川・縄田 [2014] p118 - 119。また市川 [2014] p 14では「ダッチジュゴン」と表現している。
- (12) 大竹「『おもろさうし』における玉について」『沖縄文化』第101号、2006年。大竹「『おもろさうし』にみられる水に関する語彙」『沖縄芸術の科学』第22号、2010年

[参考文献]

- 池田和子『ジュゴン 海の暮らし、人とのかかわり』平凡社選書646、2012年
- 市川光太郎『ジュゴンの上手なつかまえ方——海の歌姫を追いかけて』岩波科学ライブラリー229、2014年
- 市川光太郎・縄田浩志・編『アラブのなりわい生態系 第7巻 ジュゴン』臨川書店、2014年
- 池宮正治「人魚（ざん）を獲る」おもろ研究会『おもろさうし精華抄』ひるぎ社、1987年
- 大浜信賢『八重山の人頭税』三一書房、1971年
- 片岡照男『ジュゴン——人魚学への招待』研成社、1997年
- 亀山統一・大城保英・佐次田勉・宮城義弘『ジュゴンが危ない——米軍基地建設と沖縄の自然——』新日本出版社、2003年
- 倉沢栄一『ジュゴン データブック』TBSブリタニカ、2002年
- ジュゴン保護キャンペーンセンター『ジュゴンの海と沖縄——基地の島が問い続けるもの』高文研、2002年
- 高良倉吉「人魚と王様」『おきなわ歴史物語』1990[1984]年
- 谷川健一「もの言う南海の人魚——儒艮」『神・動物・人間』講談社学術文庫、1996[1986]年
- 名護市史編さん室・編『やんばるの祭りと神歌』名護市叢書・15、名護市教育委員会、1997年
- 波照間永吉『南島祭祀歌謡の研究』琉球叢書4、砂子屋書房、1999年
- 盛本勲『沖縄のジュゴン——民族考古学からの視座』榕樹書林、2014年
- 吉川秀樹「沖縄のジュゴンと人とのかかわり」『地理』2016年

ジュゴン用例一覧表

地域	ジャンル	番通番号	地域・場	節番号	用例	対語	意味	備考	類歌
1	オモロ	505		13	さん 捕 てる で や ば	亀	漁獲物		
1	オモロ	650		4	さん 網 結 ひ 降 ち へ	亀	漁獲物		
1	オモロ	650		6	さん 百 込 めて	亀	漁獲物		
1	オモロ	650		1	さん 百 捕 り や り	亀	漁獲物		
2	ミセロ	8	伊平屋島	32	さん の 魚 の	蛸	漁獲物		
2	ワムイ	178	名護城	19	じやんの口ふむ	じやん	神の乗り物		
2	ワムイ	178	名護城	20	じやんの口ふむ	じやん	神の乗り物		
2	ワムイ	179	名護	22	じやんの口ふむふむ	-	神の乗り物		
2	ワムイ	185	大宜味村謝名城	12	じやんの口と取ゆる	(鏡)	神の乗り物	類歌にはザン不見	
2	ワムイ	190	太草味村城	12	じやんの口と取ゆる	(鏡)	神の乗り物		
2	ワムイ	346	勝重村比嘉	3	さん の い ゆ め	スークの魚	漁獲物		
2	ワムイ	371	大宜味村喜如嘉	4	さん の 口 取 や い / 暇 ない	-	神の乗り物	→419,471	
2	ワムイ	419	大宜味村謝名城	4	さん の 口 取 ふ や い / 暇 ない	-	神の乗り物	→371,471	
2	ワムイ	471	大宜味村謝名城	4	さん の 口 取 や い / 暇 ない	-	神の乗り物	→371, 419	
2	ワムイ	384	久志村辺野古	3	ぢやんぬ魚や(大(らひ)さこ)	(緑々な魚)	漁獲物	『やんばるの祭りと神歌』	
2	ワムイ	449	久米島	3	ざ の 一 匹 (網) 百 吞 ぬ り	亀網	漁獲物	オモロ650-4	
2	ワムイ	449	久米島	3	ざ の 一 百 込 みて	亀	漁獲物	オモロ650-6	
3	アーク	2	砂川	70	さんぬ主願まい	(神名)	神名?		
3	アーク	26	池間島	47	じやんみが(儒良メガ)	-	人名(女性)	親阿母の呼び名は/-ト	
3	アーク	26	池間島	48	じやんぬな一(ジュゴンの名)	魚の名	人名(女性)	親阿母/としていて/-を/もらうか	
3	アーク	38	多良間島	30	じやんぐまい みなとぬ	-	漁獲物?	海棲生物ほどの意味	
3	アーク※	10		-	ざんめが(儒良メガ)	-	人名(女性)	親阿母の童名は-ト	
3	アーク※	10		-	さん の 名	亀の名	人名(女性)	-を与えよう	
3	アーク※	10		-	さん の 名	亀の名	人名(女性)	- 美しいものよ	
3	アーク	109		-	よのだま	いらぶらちや(魚)	漁獲物		
3	クイチヤー	19	狩俣	22	ざん	亀(の夫婦)	漁獲物	網にのつている	ジラバ25、ユンダ153、203
3	クイチヤー	19	狩俣	25	ざん	亀	漁獲物	獲物として違わず	ジラバ25、ユンダ153、203
3	クイチヤー	19	狩俣	29	ざん	亀	漁獲物、食物	-を食べるのは今	ジラバ25、ユンダ153、203
3	クイチヤー	19	狩俣	27	ざん	亀	漁獲物、食物	この が言うには	ジラバ25、ユンダ153、203
3	クイチヤー	19	狩俣	30	ざん	我ぬ	漁獲物、食物	-を食べようというのか;ジュゴンのセフ	ジラバ25、ユンダ153、203
3	クイチヤー	19	狩俣	33	ざん	我ぬ	漁獲物、食物	を許したら、郵便安全と引き換えに命をい	ジラバ25、ユンダ153、203
4	ユンダ	1	石垣島川平村	-	ざん	亀	漁獲物、食物	ざんがみや誦言	
4	ユンダ	4	石垣島川平村	-	ざん	亀	漁獲物、食物	類歌:ざんがみや誦言	
4	ユンダ	9	石垣島大川村	-	儒良亀	-	漁獲物、食物	類歌:ざんがみや誦言	
4	ユンダ	53	竹富島	-	さんなま	-	漁獲物、食物	類歌:ざんがみや誦言	
4	ジラバ	25	石垣島大浜村	13	ざん夫婦(みゆと)	亀夫婦	漁獲物、食物	→クイチヤー19	クイチヤー19、ユンダ153、203
4	ジラバ	25	石垣島大浜村	22	ざん	亀	漁獲物、食物	→クイチヤー19;	クイチヤー19、ユンダ153、203
4	ジラバ	57	石垣島白保村	5	ざんぬうでく(打組三夫婦)	亀ぬ夫婦	漁獲物、食物	前半:ものいう魚 後半:ざんがみや誦言	
4	ジラバ	57	石垣島白保村	8	ざんぬうでく(打組三夫婦)	亀ぬ夫婦	漁獲物、食物	前半:ものいう魚、後半:ざんがみや誦言	

4	ジラバ	81	小浜島	10	乗りざん	乗り亀	女性のあだ名	美人だが身持ちの悪い女性		
4	ユンタ	153	鳩間島	10	ざんぬ夫婦	亀ぬ夫婦	漁獲物	-の大馬鹿;網にかかいる		クイチャヤー19、ジラバ25、ユンタ203
4	ユンタ	153	鳩間島	16	ざんぬ夫婦	亀ぬ夫婦	漁獲物	食べられて祟る		クイチャヤー19、ジラバ25、ユンタ203
4	ユンタ	153	鳩間島	17	ざんぬ夫婦	亀ぬ夫婦	漁獲物	食べられて祟る		クイチャヤー19、ジラバ25、ユンタ203
4	ユンタ	153	鳩間島	18	ざんぬ夫婦	亀ぬ夫婦	漁獲物	食べられて祟る		クイチャヤー19、ジラバ25、ユンタ203
4	ユンタ	203	竹富島	16	ざんぬみゆどう	亀の夫婦	漁獲物	食べられて祟る		クイチャヤー19、ジラバ25、ユンタ203
4	ユンタ	220	新城島	11	ざんぬ夫婦	亀ぬ夫婦	漁獲物	-を見ようと;ざん取りユンタ		
4	ユンタ	220	新城島	13	ざんぬ夫婦	亀ぬ夫婦	漁獲物	-の隠れていて;ざん取りユンタ		
4	ユンタ	220	新城島	17	ざん	亀	漁獲物	-を見ようと走ってきて;ざん取りユンタ		
5	オモリ	232	-	13	だんぬいゆ	亀の魚	漁獲物			ウムイ884
5	あしの歌	30	-	285	ざんぬいゆ	-	漁獲物、食物	食べると逮捕される		

※地 域… 1 = 『おもしろさうし』、2 = 沖繩、3 = 宮古、4 = 八重山、5 = 奄美

ジャンル… 「アーク※」は、『大成』本文では『宮古島の歌』というくくりで収載。本稿文中では『宮古島の歌』と記載